



命の懸け橋

以前、妻から聞いたエピソードがある。私には6人の子どもがいるが、長男が小学生の頃のある日、妻にこう言つたという。「僕、大人になつても子どもはいらん」。さすがに、6人兄弟の長男ともなれば我慢することも多いのであろう、その気持ちもわからなくはない。その時、妻は、こう問



宝田町
西條 誠人さん

いかけた。「母さんは、自分という存在は、この地球上に生命が誕生してから、母さんのところにやって来るまで、その命の糸が一度も途切れたことがないという証しなんだと思つている。そして、その命の糸をあなたにつないだんだよ。その糸をあなたの気持

ちだけで断ち切つてしまつて、本当にいいの？」と。すると息子は、少しの間考えてから「やっぱり子ども、いるな。」と答えたとのこと。

ともすると、自分を単なる個としてとらえてしまいがちだが、祖父母、両親、自分、そして子どもたちという命のつながりを考えた時、一度も途切れたことがないという奇跡のような事実に対する深い感謝の念がこみあげてくる。

その糸の上の誰かが子を生み育むことをあきらめていたら、私も子どもたちもこの世に存在しなかつたのだから。

子どもたちに「自分たちは、遠い過去とはるかな未来をつなぐ懸け橋のような存在なのだ」と伝えること、その使命を思う現在である。

次は、桑野町の榎原香谷子さんをお願いします。

市民文芸

短歌

阿南市春季短歌大会選

青木 恭子

ひな祭り父母よりくれし掛軸に思いはめぐる
八十路の我は

林 満子

寒空に誘い合せて寡婦五人イベントの鱧井の
美味

湯浅佐智子

白木蓮咲き初むあした離れ住む孫の婚約整う
と聴く

川口 節子

雨の日はことに淋しき増す日なり使いなれた
るミシン踏みおり

宮本久美子

芽ばえたる愛も告げえず学舎を去りて今日は
傘寿の宴

森岡 圭子

とりどりのマスクが登校する列に白き空より
春が落下す

新居 久子

目を痛みて手入れ不足の花菖蒲小腰を伸ばし
よむ花のかず

俳句

阿南市俳句連合会選

峰 敏勝

膝をつく球児の背中夏去りぬ

能面に似し老婦人阿波しじら

谷脇 春代

病室のベットの上的の団扇かな

河野 柳史

風鈴のときおり聞ゆ畑かな

清原 栄子

幼児と自転車に乗る夏帽子

近藤とき子

子育ての髪を束ねて夜の秋

工藤千鶴子

老二人番茶の味を分けており

湯村 陽子

実盛になりきる人や虫送り

神野千鶴子

踊笠被れば齢忘るると

近藤 まい

人知れず瀨瀬小さき花芙蓉

宇川 延子

川柳

阿南川柳会 高木旬笑選

老いの膝日課となった貼りぐすり

湯浅 三子

カレーパン食わず嫌いを食べてみる

田上 鶴子

今読んだ端から消えていく記憶

武田 敏子

ふるさとの山へ抱かれに帰ります

鈴木レイ子

ハート形おむすびを食む誕生日

林 満子